

6年「武士の政治が始まる」にプラスワン

(教科書では『小学社会6上』p.38~46)

小学校の歴史学習は、通史ではなく「人物の働き」が中心となっており、この小単元も「武士のおこり」を丁寧に扱うようにはなっていない。

けれども、「源頼朝が武士中心の政治をしようとしたことの意味」を主体的に考えるためには、武士がどのようにして生まれ、力を伸ばしていったのか、平氏と源氏はなぜ対立していったのかという「時代背景」を理解していることが前提になる。

こうした時代背景を少しでも理解してから、人物の目的や業績について調べていけば、その人物の心情にまで迫れる歴史学習になっていく。

ここでは、歴史人物を調べるときの視点や、表現方法をプラスワンして、児童の主体性を引き出す方法を紹介していく。

1 「つかむ」段階に、歴史マンガをプラスワンして、時代の変化への関心を高める

教科書 p.38 資料ア「武士の館」の絵の読み取りから入る導入は、この単元の定番の学習方法だ。p.32 資料ア「貴族の屋しき」の絵と比較させると、建物が小さくなったことや、周囲に水田が広がり、敷地内にも畑があること、武士たちは武芸の鍛錬をしていることなど、数多くの特徴に気付かせることができる。

しかし、武士のおこりから源平の対立に至るまでの時代背景は、文章だけでは理解できない児童も多い。理解を深めるには、教科書には載っていない資料が必要だが、授業時数は限られているため、あまり時間をかけて指導するわけにはいかない。自作の資料を用意する場合でも、内容が難しく文字ばかりのものでは児童の追究意欲は高まらない。

そこで、児童になじみのある歴史マンガを活用した導入を行った。児童にも好評だった。

まず、平安時代までの権力の移り変わりを簡単に振り返った。

弥生時代	…	王
古墳時代	…	大王
飛鳥時代	…	豪族・天皇
奈良時代	…	天皇
平安時代	…	貴族・天皇

「さあ、貴族中心の世の中は続くのでしょうか」と投げかけたところで、児童を教室の前に集め、歴史マンガ紙芝居を始めた。マンガの吹き出しに書いている言葉を読み上げるだけでなく、マンガには書かれていないことも補いながら進めていった。例えば、次のことがらである。

- 不当に多くの税を集めようとする国司から自分たちの土地や財産を守るために、地方の豪族たちが武装して「武士」になった。
- やがて天皇や貴族の警備を任されるようになり、源氏と平氏が台頭した。
- やがて天皇と上皇の争いが起こり、それが源氏と平氏の対立につながっていった。
- 源義朝を破った平清盛は朝廷で実権を握った。義朝の息子、頼朝は、幼かったため殺されずに伊豆へ流された。
- 平清盛は太政大臣にまで出世した。平氏は大きな権力をもち、自らを「平家でないものは人ではない」と表現するほどまでになった。

こう書くと難しい内容に見えるが、マンガを見せながら話していくと、児童もとても興味をもち、身を乗り出して見入っている子や、終わった後に拍手をする子もいた。

児童は授業後に、「今の人もけんかしたりすることはあるけれど、昔の人は戦いまでするということを学んで、今の時代に生まれてよかったなと思いました。どんなににくい相手でも、子どもは殺さないであげるんだなと思いました。」などと感想を書き、当時の様子に関心を高めている様子がかがえた。

「その後、頼朝はどうしたと思いますか」と児童に考えさせ、さらに興味・関心を高めていった。児童の多くは「平氏を倒したと思う」と予想した。そして、「源頼朝はどのような世の中をつくっていったのだろうか」と学習問題を立てて、追究していった。

歴史マンガを活用した導入は、短い時間で楽しみながら時代背景をつかませることができる。

この歴史マンガ紙芝居の作り方は簡単だ。

- ① 歴史マンガの武士の始まりから平氏の世の中になっていくあたりまでの中から、10コマほどを選ぶ。
- ② スキャナーでスキャンする。あるいは、デジタルカメラで撮影する。
- ③ A3に拡大して印刷する。
- ④ 工作用紙に貼る。

※マンガ作品の使用については、著作権法の規定上、「授業の過程における使用」以外の場合は、著作権者の許諾が必要になります。

紙芝居は10枚程度が長すぎず短すぎず、ほどよい枚数のようだ。

スキャンせず、コピー機で拡大して作ることもできるが、マンガはそれぞれのコマの大きさがバラバラなので、A3に揃えるのにけっこう手間がかかる。スキャンして画像データにしてから、用紙サイズをA3にして印刷すると簡単に大きさを揃えることができる。作業時間1時間以内で完成させることができる。

歴史マンガを使った導入は、応仁の乱によって京都の町が焼け野原になり戦国時代へと突入していく様子や、ペリー来航に伴って狼狽する幕府の様子など、時代の大きな転換点の学習で特に効果的だ。

2 「調べる」段階で、鎌倉に幕府を開いた理由を考えさせ、多角的に考える力を高める

第2時には、源氏と平氏が戦い、平氏が滅ぼされたことを学習する。

第3時は、「平氏との戦いに勝った源頼朝は、どのような政治を行ったのだろうか。」という課題で、調べる学習を展開していく。

源頼朝が幕府を開いた鎌倉は、政治の中心地としては平地の少ない土地だ。朝廷のある京都と比べると、その違いはあっという間である。授業の後半には、「頼朝はどうして鎌倉に幕府を開いたのか」と問いかけて、頼朝の立場で考えさせるとよい。

T) 平氏との戦いに勝った源頼朝は、どのような政治を行ったのでしょうか。

児童には、しばらくの間、教科書などを使って自分の力で調べてみるよう指示する。

- C) 有力な御家人を守護や地頭に任命して全国各地に置いた。
- C) 征夷大將軍になって鎌倉に幕府を開いた。
- C) 手柄を立てた御家人に領地を与え、ご恩と奉公の関係をつくった。
- C) 頼朝の死後、朝廷との戦いに勝ち、支配力を強めた。
- C) 武家諸法度をつくり、法律や制度を整えていった。

頼朝が行った政治について、まずは事実を確認していく。ここで「どうして頼朝は鎌倉に幕府を開いたのだろうか」と尋ねても、児童の多くは考えをもつことができない。鎌倉の地理的な特徴が分かっていないからだ。

T) 42ページの「鎌倉の様子」や地図帳を見て、平安京のあった京都と鎌倉を比べて、違いを言いましょう。

京都と比較させることで、鎌倉の地形に目を向けさせることができる。

- C) 京都の町は碁盤の目のようになっているけれど、鎌倉は違う。
- C) 京都の方が、平らな土地が広がっている。
- C) 鎌倉も京都も山に囲まれているけれど、鎌倉の方がすぐそばに山がある。
- C) 鎌倉は、南に海がある。

鎌倉の地理的な特徴を、児童から引き出したところで、頼朝の立場で考えさせる。

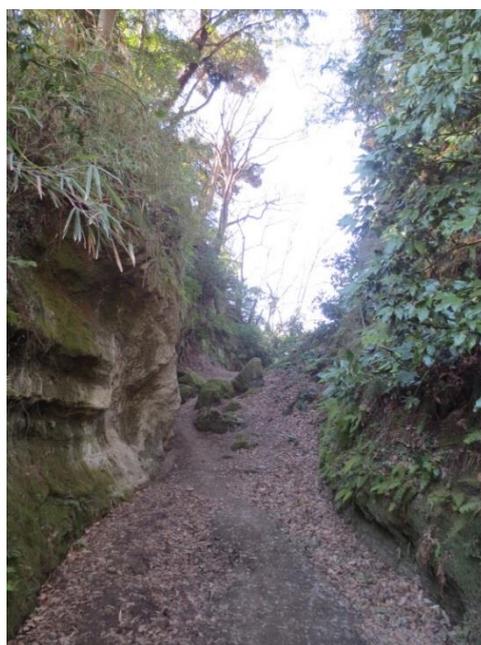
- T) どうして頼朝は鎌倉に幕府を開いたのでしょうか。
- C) 山に囲まれているから、敵が攻めにくい。

C) 海があるから、船で物を運ぶことができる。

どちらも正解である。子どもたちの考えを称賛しながら、解説を加えていく。

鎌倉に入るには、山を切り開いてつくられた「切通し」を通るしかなかった。この切通しは7か所あり「鎌倉七口」と呼ばれていた。また、山を越えて侵入する者がいないように、尾根沿いに木を伐り、見通しをよくしている。鎌倉が天然の城塞とも言える地形だったことが、ここに幕府を開いた最大の要因だ。また、海に釣り針のように突き出た場所は和賀江島と呼ばれる人工的に築かれた港湾施設で、国内船だけでなく、宋（中国）の貿易船が来航したとも言われている。

また、鎌倉は源氏の拠点だったことや、新しい政治の仕組みをつくるためには、貴族が力をもっている京都から離れる必要があったことも大きな要因だ。



この2枚の写真は鎌倉七口の一つ「大仏坂切通し」の現在の様子である。昔ながらの様子が残されている。とてもではないが大軍が通れるような幅ではない。

「いざ鎌倉」と御家人が馬で駆け付けるのもひと苦労だったことだろう。

3 「てつほう」の写真をプラスワンして、戦いの様子を実感させる

教科書 p. 44 資料ア「蒙古襲来絵詞」の絵には、元の兵士の前方に黒い物体が爆発している様子が描かれている。「てつほう」と書かれたこの武器は、球状の陶器の中に火薬や鉄片を詰めたもので、火をつけてから投石機のようなもので投げ、空中で炸裂させたと考えられている。武器としての威力は大きくないが、凄まじい音量に日本の武士団は「目がくらみ、耳もふさがり、東西の別も分からなくなった」という。このてつほう（鉄砲）や元の兵士がかぶった鉄冑、船の部材と思われる木材などが、2011年に長崎県松浦市にある鷹島の海底から出土した。インターネットで検索すると、画像をすぐに見つけることができる。

授業で「元との戦い」を学習するときには、海底から発見されたこれらの遺物の写真も提示するとよい。絵を見ただけでは、元との戦いを架空の物語のように感じてしまう児童もいるが、実物の写真を見せると現実に起こった出来事として、実感をもって捉えさせることができる。（2017年5月）

あらし 嵐 げんしゅう 元秀 東京都の公立小学校教師。教師歴 29 年。楽しみながら、調べ・考え・表現する力が高まっていく社会科授業を旨として研究・実践をしている。